

# 潮流



## 次の百年を目指して

大橋鉄工株式会社

取締役社長

大橋 雅史

大橋鉄工は昨年三月、創業百周年を迎えることができました。これもひとえにお客さま、仕入先さま、地域の皆さまのご支援のためであり、深く感謝申し上げます。

大正六年（一九一七年）三月、曾祖父の大橋忠六が名古屋市中川区で自転車や家庭用品の修理業を営む会社として創業しました。現在のものづくり会社への転換は昭和九年（一九三四年）ごろ。二男の光雄（祖父）が、自転車用空気入れの製造販売に乗り出しました。

当時の道路環境は劣悪。未舗装路が基本のため、タイヤのパンクや空気漏れのトラブルが頻発していました。ただ、肝心の空気入れ

長を遂げています。

一方で、昭和四〇年（一九六五年）代以降は、弊社の経営環境が激変しました。変動為替相場制への移行で急激な円高が進行。タイヤ空気入れ事業は輸出競争力を失い、厳しい状況に。その反面、自動車部品事業はモーターゼーションの進展で拡大基調にありました。

三代目社長の勇夫（父）は、第二の創業として自動車部品のものづくり事業への特化を決意。今まで以上に、より高品質でより安価なものづくりを行うための人材確保、トヨタ生産方式をはじめとした知識習得、最新設備の導入などに必死で取り組みました。昭和六〇

は入手が困難で、普及が遅れていました。ドイツからの輸入品で値段が高かったためです。そこで光雄は一大決心します。「高品質で安いタイヤ空気入れを造れば大勢の人に喜んでもらえる」と。それからわずか一年で、日本初の自転車用空気入れ生産ライン立ち上げにこぎ着けました。

トヨタ自動車さまとのお取引は昭和二年（一九三六年）から。前身のトヨタ自動車工業さまより、「GA型トラック」に標準装備するタイヤ空気入れのご注文を初めていただきました。その後、タイヤ空気入れを造る加工技術が評価され、条鋼材やパイプ材のプレス、溶接部品を受注。現在、弊社の主力部品に成

長を遂げています。

年（一九八五年）にはタイヤ空気入れ事業を分社化。ニーズの異なる二つの事業を存続できました。

弊社は本社工場（愛知県北名古屋市）のほか、秋田県横手市とベトナム北部に位置するビンフック省に生産拠点を構えます。

ベトナム工場は、現地生産の拡大が見込まれるAT（自動変速機）など、部品の需要増に対応するために立ち上げました。平成二七年（二〇一五年）一月に操業開始し、デンソーベトナムさまへ条鋼材の加工部品を納めてます。昨年からは、現地日系メーカーさまと「カチオン塗装」のみのお取引を始めています。

秋田工場は、昨年二月に稼動。トヨタさ

まやトヨタ自動車北海道さま、アイシン・エイ・ダブリュさまへ、「パーキングロット」と呼ぶ、ATを構成する条鋼材加工部品を納入しています。

BCP（事業継続計画）対応の強化に加え、主要取引先さまの増産計画に対応。さらに、現地の人材育成に注力し、東北の自動車産業の発展に貢献するのが秋田進出の狙いです。日本のものづくりを秋田から世界に発信する努力を日々積み重ねています。

国内では愛知県外で初の進出先として秋田を選んだ大きな理由のひとつが、高い人間力で。義務教育で習得する学力は全国トップクラス。誠実で温厚、粘り強く、バイタリティーと責任感の強さが特徴です。地道に愚直に徹底的に取り組む姿勢が求められるものづくりにはぴったりの場所ではないかと感じています。

二〇二三年（平成二五年）八月、私は伊勢神宮の式年遷宮行事に参加いたしました。式年遷宮は二十年に一度、社殿を最新技術で建て替え、奉納する宝物や装束なども新調して神様に引越してもらおう行事です。十〜二十代の若手は技術・技能を習得。三十〜四十代の働き盛りの職人は第一線で技術・技能の腕を振ります。そして五十〜六十代のベテランは技術・技能を伝えながら仕事のでき栄えと納期を管理します。

日本のものづくり文化を伝承していくために、それぞれの立場に応じた役割と責任を果たしていくことの大切さを改めて学ぶことができました。

式年遷宮のように、日本のものづくり文化をベテランから若手に伝承していけるよう、弊社も引き続き取り組んでまいります。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。